





バルザック全集

3

東京創元社

バルザック全集 第三卷



昭和四十八年七月二十五日 発行  
昭和五十年八月十五日 再版

訳者

山<sup>やまの</sup>鈴<sup>すず</sup>河<sup>か</sup>川<sup>かわ</sup>内<sup>うち</sup>木<sup>き</sup>盛<sup>も</sup>口<sup>くち</sup>好<sup>よし</sup>健<sup>けん</sup>義<sup>よし</sup>  
篤<sup>あつ</sup>藏<sup>むら</sup>郎<sup>らう</sup>雄<sup>お</sup>

発行所

(株) 東京創元社  
代表者 秋山孝男

(18) 東京都新宿区新小川町一―一六  
電話 東京(〇三)二六八一―八二三―  
振替 東京 一五六一―五

印刷・相馬印刷株式会社  
製本・株式会社鈴木製本所  
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集 第三卷 目次

あら皮・・・・・・・・・・三

護符・・・・・・・・・・五

つれない女性・・・・・・・・六

苦悶・・・・・・・・・・一五

エピローグ・・・・・・・・三三

追放者・・・・・・・・・・三五

シャベール大佐・・・・・・・・二五

解説・・・・・・・・・・三一

装幀 松田正久

あ  
ら  
皮

鈴山  
木内  
健義  
郎雄  
訳



スターン (トリストラム・シャンディ 322 章)

---

科学翰林院会員

サヴァリー氏に

## 護符

昨年の十月もおわりのころ、おりからほうぼうの賭場が、その性格からいって当然課税される種類の道楽を保護する法律の規定にしたがって開場されるといふ時刻に、ひとりの青年がパレ・ロワイヤルに入つていった。青年は、さしてためらうでもなく、三十六番という名称がつけられている博奕場の階段をのぼつていった。

「お帽子をどうぞ！」無愛想に叱りとばすような声でどうどなったのは、顔色のわるい小柄なじいさんで、柵をへだてて、蔭のところにくまっていたのが、げすな鑄型にはめたような顔をのぞかせながら、立ちあがりざまこういつた。

賭場に入るときには、まず手初めにかならず帽子をはず

取られることが不文律になつてゐる。はたしてこれは福音や神の摂理の寓喩とでもいうのだろうか？ それとも、なにか抵当を取りあげておき、諸君とのあいだに悪魔の契約をとり結ぶ手だてにでもするのだろうか？ それとも、これから諸君の金品をまきあげようとしてゐる連中のまえに、懺悔の礼をつくさせようともいうのだろうか？ あるいはまた、社会のどんな泥沼のなかにでももぐりこんでいる警察というやつが、諸君の帽子屋の名前なり、あるいはまた諸君の氏名にして帽子に書きつけてあったとしたら、その諸君の氏名なりを知ろうともいうのだろうか？ さもなければ、頭の寸法をはかつて、賭博者の思考力について参考になる統計でも作りあげようともいうのだろうか？ こうした点については、その筋は絶対沈黙をまもつてゐる。だが次のことだけは銘記しておいたらいいだろう。すなわち、諸君にして、緑色のラシヤをおおつた賭博台に一步足をちかづけるやいなや、すでに帽子が諸君のものでないのおなじく、諸君自身もまた自分のものでなくなるということ。諸君自身はもとよりのこと、財産も、帽子も、杖も、外套も、いわばすべてのものが賭けられてしまふのだ。そして、いざ帰らうといふときになると、《賭博》は、諸君に預り物をかえしてくれながら、いかにも辛辣な諷刺といつたように、諸君にまだ何か残つていたもののあることを教えてくれるだらう。それにしても、もし諸君の帽子が新しかったりしたら、諸君はしみじみと、賭場がよいには特別な仕度をしてくる必要があるということ



を思い知らされるにちがいない。

ところで、これはまたおあつらえむきに縁のところがいささかすり切れている帽子と引きかえに番号札を受け取った青年のみせた驚きの表情から察して、彼はまだ初心者らしかった。そこで、若いころから博奕<sup>ばくち</sup>うち渡世のたぎりたつ快楽のなかで暮してきたにちがいない例の小柄な老人は、この青年のほうへ、どんよりした熱のない一瞥をくれたのだ。それこそは、もし哲学者だったとしたら、おそらくそこに慈善病院の惨苦、破産した人びとの放浪生活、数かぎりない窒息死の検視書類、無期懲役、グワザコアルコへの追放(メキシコ湾に注ぐ川、一八一三年その支流にフランス政府は植民計画を立てた)などの影を読みとらずにはいられないような一瞥だった。この老人、いまはわずかにダルセのセラチン・スーブ(化学者ダルセ(一七七七—一八四四)の発明した栄養食品)で余命をつないでいるにすぎない、この生気のない顔をした老骨こそは、おきまりのどん底まで追いつめられた情熱の色あせた姿をしめしているものにはかならなかった。その皺には、古い苦悩のあとがぎざまれていた。それは確に、わずかな給料を受け取ったその日に、賭ってしまわずにはいられないといったような男だった。いくら鞭うってもききめない驚馬のように、もうなにか一つ彼をふるいたせるものはないのだ。身代かぎりになって出て来る賭博者の悲痛なうめきも、その無言の呪詛も、そのうつけたような目ざしも、いまの彼にはなんの感慨もおこさせるものではなかった。まさに、《賭博》の化身そのものだった。もし青年にして、このみじめな門番の姿を眺めたら、

彼はおそらく「この男の心のなかに、一組の花札しかない」と思ったにちがなかった。だが、このふりの客は、ちょうど神の摂理が悪所の入口を不愉快にしておくのとおなじ筆法で、ここでも神の摂理によってそこにおかれているとしか思えないこのなま身の教訓に耳をかそうともしなかった。彼はつかつかと部屋の中へ入っていった。そこでは黄金のひびきが、欲心にはちぎれそうなる人びとの心の上にはげしい誘惑をほしきまにしていた。この青年こそは、ジャン・ジャック・ルソーのあらゆる雄弁な言葉のなかでもいちばん筋のおつた、《そうだ、自分にも、賭博におもむく人の気持がわかる。だが、それは、その男と死とのあいだに、最後の貨幣が一枚しか残っていないときなのだ》といった意味の言葉、どおりに追いつめられて、ここへ現われたものにちがなかった。

夕方の賭場には、一種の卑俗な詩のほかには見出されない。だが、その詩の効果たるや、血なまぐさい一篇のドラマにも負けないほどのものをもっているのである。それらの部屋々々には、見物人や賭博者たち、あたたまろうとしてそのあたりをうろろろしている貧しい老人ども、そわそわと落ちつかない顔をした人びと、酒にはじまり、終りはいずれセーヌ河と相場のきままっている乱痴気さわぎなど、ちゃんと道具だてがそろっている。有頂天にきおいたってはいるものの、あまりに役者が多すぎるので、《賭博》の魔神の風貌をまともに眺めることもできない。こうした夜の情景こそは、まさに一曲の大合奏である。よりあう

手合はいっせいにわめきたて、オーケストラの楽器はどれもこれも、めいめい勝手な楽句をかんでている。そこには、身分のたかい人たちが興をもとめやつて来て、見世物や食道楽で散財するのとおなじように、あるいは屋根裏部屋の安もの買いで骨身にこたえる三月ばかりのお灸をもらうのとおなじように、散財している姿が見られるにちがいない。だがはたして諸君には、賭博の開帳をかたずおわかりだろうか？ 朝の賭博者と晩の賭博者とのあいだには、無頓着な夫と、愛する女性の窓の下で失心する恋人といったほどのへだたりがある。朝になつてはじめて、あの胸の高鳴るような情熱や、あからさまな恐怖にたいする欲求がうまれてくるのだ。こうした時になつて、諸君ははじめて、ほんとうの賭博者、ものもたはず、眠りもしなければ、生きも考えもしなかつた賭博者、マルタンガル(賭博の一種)の管の下にあればどまでにたたきのめされ、トランテカラント(シブの一種)を一番やりたさの衝動にかられるままに、あれほどまでにあがきぬいた賭博者の姿を見ることができらるだろう。そうした呪われた時刻になつて、諸君は、初めて、あのぞつとするほど落ちついた目、射すくめられるような顔、カルタをめくつてむさぼるように眺めいつている目ざしに出あうことができるだろう。要するに賭場というやつは、いよいよ場が開かれるという時だけが厳粛なのである。スペインに闘牛があり、ローマにはそのむかし剣闘士(剣闘士)がいたとするなら、今日のパリは、バレ・ロワイヤル

をもつことを誇りとしている。人の心をおおるあのルーレットは、目のあたり流血淋漓と流れる痛快なところを見せてくれるが、そのために床を踏む足がすべったりする心配はない。たぬしに、こうした闘技場をちよつとのぞいて見よう。さて中に入ると……これはまたなんとという殺風景なこと！ 手のとどくあたりまで垢じみた壁紙がはつてある壁の上には、見る人の心をさわやかにしてくれるような額縁ひとつかかつていない。自殺しやすいうようにと、釘一本打たれてはいない。床はすりへつて、汚れほうだい。一台の細長いテーブルが部屋の中央を占めている。黄金にすりへつたこの賭博台のまわりにならべられた粗末な椅子は、富と奢り(おごり)をねらつて身をほろぼしにくる人たちが、奢侈というものにはたいしては不思議に無頓着なことを物語っている。こうした人間の矛盾は、精神が自己にたいして逆反応を呈する場合にかならず見られることなのだ。恋する男は、愛人を絹でつつみ、愛人にやわらかな東洋の織物を着せたいと念じながら、多くの場合、これらを貧しい寝床のうえに擁している。大望をいだくものは、権勢の絶頂にたつ身を夢みながら、卑屈な泥沼のなかにはいつくばつてい

奇妙なことなのだ！ たえず自己に反逆し、現在の不幸でもって希望をばぐらかし、わが身のものでない将来によって現在の不幸をまぎらし、こうして人間はあらゆる行為に無反省、無氣力の刻印を押してゆく。現世において完全なものといったら、不幸以外になにもないのだ。

青年が部屋のかなかに入って行ったときには、すでに何人かの賭博者たちがいた。頭のはげた三人の老人が、緑の賭博台のまわりにお精たらしく腰をおろしていた。外交官のご面相とでもい無精たらしく腰をおろしていた。外交官のらの石膏の面魂めんたまは、たとえひとりの人妻の財産まで賭けてしまおうとも、胸をわくわくさせることなどとうの昔に忘れてしまっているといったような、ずさんだ心の所有者であることをしめしていた。髪の毛の黒い、オリウがかった顔色の若いイタリア人が、台のはしに静かに脇をついて、さも賭博者にむかって宿命のように「イエス！」とか「ノー！」とか呼びかけるあのひそかな手惑の声に耳をかたむけてでもいるようだった。その南国人らしい顔のうえには、黄金への情熱があふれていた。七人の見物人は、まるで柱廊といったようにいならんで、運命の骰子、賭博者たちの悲喜もごもの面持、金銭の受けわたし、熊手の動きなど、すっかり道具だてのそろうた舞台の動きをいまやおそしと待ちかまえていた。こういう所在のない連中は、あのグレーヴ広場で死刑執行人の斬首を見物する群衆さながら、だまりこんで、身動きひとつせずに、じっと目をこらしているのだった。よれよれの服を身につけた、背の高

い、やせぎすな男が、赤アカなり黒クロなりのパスの数を記録するために、片手には帳簿を、片手にはピンを持っていった。これこそは、時代の歓楽の周辺に生きている現代のタシタル、空想の博奕を楽しんでる金のない吝嗇漢、空想をはぐくむことよって自分の貧窮をなぐさめ、ちょうど白いミサをとめる神父の卵が聖餐をもてあそぶように、罪と危険をもてあそんでいる一種の理性ある狂人といった手合なのだ。胴元の正面には、ガリー船をこがされる苦役などくそくらえといった昔の徒刑囚そっくりな、腕っこぎの連中がひとりふたり、三べんばかりも張ってみて、万が一にも生活費くわいひつだけでもうまくかせげたら、さっさと退散する肚はらでひかえていた。歳としのいったふたりのボーイは、腕ぐみしたままぶらぶらと歩きまわっている。そして看板がわりに、自分たちのひらべったい顔を往来の人に見せるためとでもいうように、ときどき窓ごしに庭のほうを眺めるのだった。ちょうど元締と胴元が客人たちのうえにじろりともものすごい一瞥をくれたうえで、「さあ張ったり！」とかんだかい声をたてたところへ、青年が戸をひらいた。沈黙がさらに深められたような感じだった。そして人びとの顔は好奇心にそそられて、いっせいにこの新米の客のほうにむけられた。と、あろうことか！ 鈍な老人どもも化石のような係員どもも、見物人も、さてはあの狂信的なイタリア人までが、この見知らぬ青年の姿を見るなり、なんともいえない恐ろしさにおそわれたことだ。あらゆる悩みはおし殺され、財布の底をはたいても陽気になり、絶望も

ひたかくしにされるはずのこの部屋で、しかも人びとから  
気の毒がられるとは、よくよくの不幸だからではあるまい  
か。人びとの同情をそそるとは、よくよく弱いからではあ  
るまいか。人びとをおのかせるとは、よくよく沈痛な顔  
をしているからではあるまいか？ そうだ、青年が入って  
来たたとんに、そこにいあわせた氷のような心の人びとを  
動かした新しい感情のなかに、こうしたすべのものがこ  
められていたのだ。もつとも革命の合図とともに、ブロン  
ドの頭を打ち落される運命にあった乙女たちをまえにして  
は、さすが非情な首斬り役人も涙を流したことがあったで  
はないか。

遊び人たちはただのひと目で、この新参者の顔に、なに  
かしらおそろしい秘密があることを見てとった。その若い  
容貌はうれいありげな風情をきざみ、その目ざしは、かず  
かずのむくいられなかった努力、裏切られた希望を物語っ  
ている！ 自殺者にもられる陰惨な無感動が彼の額を病的  
な土気色にそめ、苦笑をうかべた微笑が口もとに小皺をき  
ざみ、顔全体が見るからにいたいたしいあきらめをしめし  
ていた。快楽の疲れににごったとも見える目の底には、な  
にか人しれぬ才能のひらめきがかがえた。その高雅な容  
姿も、かつては燃えるような純情にかがやいたのだらう  
に、いまでは見るかげもないが、この容姿に汚濁の烙印を  
押し込んだものはたして放蕩であつたらうか。医者ならば、  
この腫をくまどる黄色い輪、頬にさす赤黒い血の色を、お  
そらくは心臓か肺の痼疾にでも帰したことだらう。また詩

人ならば、これを学問の害毒、勉学のともし火のもつで夜  
をふかした結果と見るにちがいない。しかし事實は病いに  
もまして致命的な情熱、研究や勉学にもましてなまけ容赦  
のないわづらいが、このわかわかしい頭脳をいためつけ、  
はりきった筋肉を弛緩させ、むかしは夜遊びにも、勉強に  
も、病気にも、ほとんど傷つけられたことがないような心  
臓に、とうとうひびをいれてしまったのだ。なうての罪人  
が徒刑場に姿をあらわすや、囚人どもは畏敬の念をこめて  
これをむかえるというが、それとおなじく、人生の酸いも  
甘いもなめつくしたこの悪魔どもも、彼らの目でにらんだ  
このたとえような苦惱、この底しれぬ痛手には恐れを  
おぼえ、口にごそ出さないが、その皮肉のきびしさ、さて  
は身だしなみの見すばらしいなかにもうかがえる伊達な好  
みに、この青年を彼らの王子とまつりあげてしまった。彼  
は趣味のよい燕尾服を着ていたけれど、チョッキとネクタ  
イの合せ目があまりにもさかしげにきつちりしすぎて、ま  
るで下着を着ていないのではないかとまで思われた。女の  
ようにきれいな彼の手も、清潔ということにかけてはどう  
やらいかがわしく思われた。とにかくこの二日のあいだ手  
袋をはめていなかったのだ！ 胴元やボーイまでがぞつと  
したとすれば、それは純情の魅力が、その弱々しげなほそ  
い容姿や、自然にカールしているブロードの薄い髪の毛の  
なかにかすかながらも跡をとどめていたためだらう。まだ  
二十五歳の容貌には、不徳もなお偶然なものとしかみえ  
ず、青春のわかい生命は荒淫の害毒になお抵抗していた。

その容貌には闇と光、虚無と生命がたがいにいどみあいながら、こもごもに幽艶と凄愴とを織りまぜていた。この若者は道にまよった光なき天使のようにその姿をあらわしたので。したがって、そこにいわせられた不徳と醜行にかけての老大家どもは、まるで歯抜けばあさんが墮落の道をとどる娘をながめてあわれむように、口をそろえてこの新参者に「帰りましたえー」と叫びかねない形勢だった。しかし、

彼のほうはまっすぐに盤のところまで歩みより、立ったままなんのためらう気色もなく、手にしていた一枚の金貨を標立板のうえにほうりだした。その金貨は黒のうえにころがっていった。すると、彼は意志の鞏固な人にみられる、わが身のとつおいつする不決断をにくむようなようすで、焦慮と平静をまじえた一瞥を胴元にむけた。この態度にふかく興味をひかれた老人どもは、自分たちが金を賭けることも忘れていた。ただ、情熱にたいする妄信をうしなわないうイタリア人だけが、ふと彼の心にはほえみかけた考えをとっさにさとして、ひとつかみの金貨を、若者とは逆の場所にはった。元締さえも「さあ張った！——始めるぞ！——それまで、それまで！」という、例のくせで最後は意味をなさないしゃがれ声におわってしまふあの掛け声をいい忘れていた。胴元はカードをひろげながらも、このいかかわしい遊びで儲けようが損をしようが、いっこうに頓着ないという面がまえているこの新参の客に、幸あれかしと祈っているかのようにみえた。見物人たちはたれしもこの金貨の運命に、一つのドラマを、貴い人生の幕切れを見よう

ものと念じていた。運命を決する盤上に吸いよせられた彼らの目ははげしくかがやいていた。しかし、彼らが心をこらしてカードと青年の顔とを等分に見くらべているにもかかわらず、このあきらめすました冷静な顔からは、感動の影さえも読みとることができなかった。

「赤、偶数、パス」と胴元は事務的に叫ぶ。

元締の投げてよこした紙幣が、ばらばらと落ちてくるのを見た瞬間、イタリア人の胸からは一種うめくようなため息がもれた。青年はといえば、熊手がのびて彼の虎の子のナポレオン金貨をさらってゆくまでは、自分の敗北を知らぬげであった。熊手が象牙にあたって鈍いひびきを立てたかと思うまもなく、その金貨は金庫のまえに山とつまれた貨幣のなかに、矢のようにまぎれこんでしまった。青年は静かに目をとじる。その唇からは血の気がうせた。だが、やがて瞳を見ひらいた彼の唇は、珊瑚のような赤さを取りもどしていた。彼は人生に神秘なしというようなイギリス人の態度をよそおい、絶望の客がよくやるように、廊下で見せるいたしい目ざしに同情をもとめるということもせずに姿を消してしまった。この一瞬のあいだに、どれほどの波瀾が錯綜していたことだろう。また、この骰子の一擲に、どれほどの事件が輻輳していたことだろう？

「こいつはてつきりなげなしの虎の子ですぜ」しんと静まりかえったひととき、元締は親指と人さし指でこの金貨をつまんで、いならぶ人びとに見せびらかしながらいった。

「あの気がいい、身投げでもやらかすぞ」ひとりの常連が

顔見知りの客どもを見わたして答えた。

「えへっー」ボーイがかきたばこをつまみながらとんきょうな声をだす。

「おいらも、だんなのまねをすりゃあなあー」ひとりの老人が、イタリア人を指さしながら仲間に入った。

一同の目がふるえる手で紙幣をかぞえている幸運の客にそそがれる。

「おれは、博奕の神さまがあの若僧の絶望に味方しないぞ」という声を、この耳で聞いたんだ」とイタリア人はいった。

「ありやずぶのしろうとですぜ」と胴元が言葉をついだ。「それでもなけりゃ、あの金を三つにして少しは掛引きをやりませあね」

青年は帽子を受け取らずに行きすぎようとした。しかし、この見すばらしい男のおもわしからぬようすを見てとった番人の老爺は、言葉もかけずに帽子を手渡した。すると客も機械的に割札をかえし、《ディ・タンティ・パルビティ》の口笛「ロッシニのオペラ「タ」をいかにも弱々しく、そのころよい調子が彼自身の耳にも入るや入らずの程度で吹きながら階段をおりていった。

やがて彼はパレ・ロワイヤルの行廊に姿をあらわし、サンクトノレ街に出るとチユイルリの舗道にそって、あやしげな足どりで公園を横切った。砂漠のまっただなかでも歩いているかのように、道ゆく人びとと袖すりあわせても、それが目に入らず、群衆の騒音をとおして、ただひとつ死

の声を耳にするばかりだった。つまりは、一七九三年このかた、あらゆる血汐でめめられた絞首台のあるグレーヴ広場の徒刑場に、法廷から車ではこぼれた死刑囚がつかれたような、身もそぞろな瞑想にふけていたわけだ。

自殺というものには、なんということもなく偉大な、おじけをふるわせるものがある。多くの凡人どもの没落、これは子供が落ちるのおなじことで、けがをするほど高いところから落ちるのではないから危険はない。しかし偉人がくじける場合には、天までのぼって隔絶した楽園をかいま見たあげくに、高いところから落ちるのだ。そういう人物をして、われとわが身に拳銃の筒口をむけさせ、むりにも心の平静をもとめさせる嵐こそは、確かになんともいえないほどのものにちがいない。どれほどの有為な逸材が、かすしれぬ衆愚のただなかで、ありあまる金にもあきて無聊をかこつ多くの凡俗の面前で、ひとりの友、ひとりのなぐさめの異性もないままに屋根裏部屋にとじこもつたまま、色あおざめて朽ちゆくことか！ こう考えてくると、自殺という問題はたいへんなひろがりを持つものである。進んで死をえらぶことと、青年をパリにまねく希望にあふれた声とのあいだに、どれほどの思い、かえりみられない詩情、絶望、息づまるうめき、水泡の努力、画餅の傑作が相慰しているかは神のみが知ることだ。どんな自殺といえども、すべては憂惑をうたつた崇高な詩なのである。

《昨日四時デ・ザール橋より妙齡の婦人セーヌ河に投身自殺す》

という新聞記事と才能をきそえる作品を、海原なす文学のどこにもとめることができるだろうか。

パリのこの簡明な社会記事をまねにしては、戯曲も、小説もさては妻子をすててかえりみなかったあのスタン（ロレンス・スタン（二七三二―七七）（六八）アイルランド生まれの小説家）をして、一読涕泣させたといい、いまはなき書物の最後の断片《王子らの手によつて獄屋につながれた光輝あるカエルナヴァン王の悲劇》という古書の標題すらも色あせてしまう。

青年は、さながら戦場のまっただなかに打ち破られて飛散する軍旗のように、彼の心をちちに乱すこの種のはてしない思いにせめさいなまれた。彼はひととき、理知と記憶の重荷をふりすてて、草花がその頭をそよ風に柔らかくうちゆるがせている緑のしげみの前に足をとめたものの、やがて自殺という重苦しい考えのもとでなおもがきつづける生命の痙攣にさそわれて、ふと目を空にむけた。しかし、灰色の雲が、悲しみをはらんだ一陣の風が、沈鬱な空気が、ここでも彼に死ぬことを慫慂している。彼はロワイヤル橋のほうに足をむけながら、それまでの自殺者がいまわのきわにもとめた最後のなぐさみに思いをうつした。カッスルリー卿（ロバート・ヘンリー・スチワート（一七六九））は咽喉をかき切るにあたって、われわれ人間の欲求のなかでもいちばんつつましいものを満足させたという。また、アカデミー・フランセーズの会員オージエ（ルイ・シモン・オージエ（一七二二―一七九二）当時全盛のロマン派に属した文芸批評家）は死におもむきながらかきたばこを求めたという。彼はこんなことを思いめぐらしてはほえんだ。そし

て、これらの不思議を分析しながら、自分の心をはかつてみた。その拍子に、一人の市場人足を通してやるために、道をよけて橋の欄干によりそった彼は、人足が白くよこしていった着物の袖を、思わずもといねいに払ってしまった。アーチ形のいちばん高くなったところまで来ると、彼は陰気に水をのぞきこんだ。

「身投げにはお天氣がわるいね」ぼろをまとったひとりの老婆が笑いながら彼に投げかけた。「セーヌ河の、なんてにこつてひえびえていることつたら……！」

彼は心の興奮を物語る気さくな笑いでこれにこたえた。

しかし、遠くチュイルリ河岸に、一尺もあるうという字体で『水難者救護所』と看板をかかげている小屋を眺めて思わず身ぶるいした。ダンニュー氏（一八三〇年頃、パリのセーヌ河岸に監獄官）がその博愛主義に身をかため、仁徳の權をこぎながら、不幸にして水面にうかびあがった水死体の頭蓋骨を打ちくだいてゆく姿を、彼は心にえがいた。やじ馬を呼びあつめ、医者を呼びに走らせ、燻蒸療法（水に溺れた人に煙草の煙をかけた当）を準備する氏の姿が目にかんじた。彼は新聞記者が饗宴の歓楽と踊子の嬌笑にとりまかれて書いた記事を読むような気がした。警察署長が船頭どもに支払っている銀貨の音を耳にした。彼だって死ねば五十フランの値段になる。しかし生きていたのでは、身寄りもなく友もなく、帰るべき家も臥床もなく、人の口の端にもぼらない一介の才人にすぎない。国家社会などということはさっぱり念頭がない、社会的にはゼロ、国家にとっては無用の長物に

すぎない。真昼の死はさすがに見ぐるしいと思つてか、彼  
は自分の生命の偉大さを認めなかつたこの社会に、不可解  
な死骸をゆだねるべく、夜に入つて死ぬ決心をした。そこ  
で彼はさらに歩みを続け、時間つぶしをするのききな閑人  
の足どりをよそおつて、ヴォルテール河岸へとむかつた。

河岸のかど、橋の舗道のもとをなしている石段をおりた  
ところで、彼の注意は河岸にならんだ古物商の店に吸いよ  
せられ、あわや、とある店をひやかさうとしたけれど、彼  
はふとうす笑いをもらし、しかつめらしくズボンのポケッ  
トに両手をつっこみ、つめたい嘲弄をただよわせて、いか  
にも無頓着な態度で歩みをつづけた。と、そのとき、不思議  
にもポケットの底で金が鳴る音を耳にして彼はハッとす  
た。希望の笑みが顔にうかがび、唇から鼻すじへ、額へとつ  
たわり、陰気な頬や目を喜びにかがやかした。この幸運の  
ひらめきは、ちょうど、火に燃えた紙の焼け残りをなめる  
焰にも似たものである。しかし彼の顔は悲しい灰の運命を  
になつていた。ポケットから勢いこめて抜きだした手に、  
三枚の銅貨がにぎられているのを見て、彼の顔はまたもや  
くもつてしまった。

「だんなさま、ラ・カリタ、ラ・カリタ、カタリナー！ど  
うぞおめぐみを！」

顔はむくんでどす黒く、からだは煤によごれ、ぼろぼろ  
の着物をまとつた若い煙突掃除夫が手をさしのべて、彼の  
最後の銅貨をねだつた。

この小柄な掃除夫から二歩もはなれたところには、病身

らしい、ものほしげな年寄りが穴だらけのつづれ織りを小  
ぎたなくまどつて、だみ声にいった。

「だんな、どうぞおめぐみを。だんなのために祈りましょ  
う……」

しかし、青年がそのほうに目をやると、老人は自分のみ  
じめさにもまして激しい痛ましさを、この青年の沈痛な面  
持にみてとつたものだろう、にわかにかつて口をつぐんでもの乞  
いをやめてしまった。

「ラ・カリター！ラ・カリター！」

青年は子供と老人にあり金を投げあたえ、舗道をはなれ  
て家のあるほうにむかつた。セーヌ河の身にしみる情景が  
彼にはたえられなかつたのだ。

「だんなの長命をお祈りしましょう」とふたりの乞食が叫  
んでいる。

死にのぞんだこの青年は、版画商のショー・ウィンドー  
の前まで来ると、りっぱな馬車からおりたとうとする妙齡  
の婦人に会つた。彼がたのしげにながめる婦人の白いおも  
ざしは優雅な帽子の罫子に調和よく縁どられている。きや  
しゃなからだつき、美しい身のこなしに、彼の心はひきつ  
けられた。ステップにかかるくからげた裾に、ちらとのぞい  
た脚の繊細な輪郭が、びつたりついた白い靴下にえがき出  
されている。この婦人は店に入り、アルバムや石版画集な  
どをひやかした。彼女が支払つた何枚かの金貨が、勘定台  
のうえできらめきながら音をたてた。青年は入口のショ  
ー・ウィンドーにならべてある版画に見入るふりをよそお



いたが、この見ず知らずの美人が通行人に投げかける無頓着な目ざしの一つにたいして、さすような目くばせをしきりに送った。彼にすれば、恋愛への、また女性への別れであった！だが、この力をこめた最後のさそいも、うわ調子な女の心には通じなかったものらしい。彼女は心を動かすこともなく、顔を赤らめもしなければ、目を伏せもしない。また女にすれば、これがどれほどのことであつたらう？世のなかに彼女を礼讃する人間がまたひとりでき、彼女を思慕するものがふえたと考えるくらい、そしてせいぜい、夜になってから彼女に《ききょうは功德をしたわ》というあまい言葉をささやかせるのが関の山といふところだらう。青年は足ばやに隣りのショー・ウィンドーへ歩みをうつし、女が車に乗りこんだときには振りむこうともしなかった。馬が走りだすと、この贅と美の最後のおもかげもまた、消えようとする彼の人生と同じように姿をかき消した。彼はさしたる興味もないくせに、商品の見本をひやかしながら、いかにも心たのしまない足どりで、店にそうて歩をはこんだ。店がつきると、ルーヴル博物館、学士院、ノートル・ダム寺院の塔、パレの塔、ボン・デッサールなどを見わたした。これらの建造物は、灰色の空模様をうつして淋しい眺めを呈していた。そしてパリ市は、空からの鈍い光をうけて、一種のすさまじい姿をあたえられ、まるで美女のように、美と醜のうにいわれぬ気まぐれにさらされていた。こうして自然までが、死にのぞんでゐるこの青年を、いたましい興奮におとし入れようとして

力をあわせている。この悪意をしめす力は、われわれの神経を循環する液体のなかに、その有毒作用の媒介をえて、そのために彼のからだの機関はいつのまにか流動現象をおこすような感じにとらわれていた。この苦悶の嵐が波に似た運動を彼につたえて、建物といい、人間といい、いっさいが霧につつまれ、波うってみえた。彼は肉体の反作用が精神につたえるむずがゆさをまぬがれようと思つた。そして、感覚に糧をあたえるつもりか、あるいは芸術品をひやかしながら日暮れを待つつもりか、一軒の古物商の店へ足をむけた。それはいわば絞首台にむかう罪人が自分の力にたよりきれずに、気力をもとめ、興奮剤をのぞむようなものであつた。しかし目前にせまつた死を自覚している青年は、ひととき、まるでふたりの恋人をもつ公爵夫人といったように落ちつきはらい、酔いどれのように引きつった微笑を口のあたりにただよわせて、傍若無人の態度で骨董商の店に入つていった。彼は人生に、いなむしろ、死に酔つていたのではないだろうか！彼はそのうちまたもとの眩暈におちいつてしまった。見るものが相変らずあやしげな色をおびて、かるい動揺をともなっている。これはたしかに彼の血液が、あるいは滝のようにほとばしったり、あるいは、なまあたかいかい水のように静かに淀んだりする、循環の不整に原因しているのだつた。彼はただ自分の氣にいるような品物があるかどうか、それを見るために店を歩きまわるつもりだつた。ところが、獺皮の帽子をかぶつた、髪の毛の濃い、しもぶくれのかわいい顔をした小僧が、鬼